

ヴァルター・ベンヤミンとフーゴー・
フォン・ホーフマンスタール

—— 両者の関係と評価に関して ——

園 田 尚 弘

Walter Benjamin und Hugo
von Hofmannsthal

—— Über ihre Beziehung und
gegenseitige Einschätzung ——

Naohiro SONODA

序

ベンヤミンが著作家として出発するにあたって、ホーフマンスタールの強力な支援があったことは周知の事実である。ホーフマンスタールは彼の編集する雑誌『新ドイツ寄稿 (Neue deutsche Beiträge)』にベンヤミンの『ゲーテの親和力』を掲載したし、ベンヤミンの教授資格申請論文『ドイツ哀悼劇の根源』がローヴォルト社から出版される以前に、その一章をやはり『新ドイツ寄稿』に掲載した。彼はまたベンヤミンの将来の生活基盤を築くための努力に対しても、推薦状を書くなどして、ベンヤミンに助力の手をさしのべた。ベンヤミンの主要著作二編の掲載さらにベンヤミンの未完成の論稿、『パリのアーケード』についての個人的助言のことを考慮すると、ホーフマンスタールは、ベンヤミンの批評的資質の本質的部分と接触した作家であったと言える。このような意味で、この論稿では、ベンヤミンとホーフマンスタールの交渉について叙述しながら、両者の交渉の焦点となったいくつかのベンヤミンの批評作品の検討をしたい。それらの批評作品とは、前述した『ゲーテの親和力』、『ドイツ哀悼劇の根源』、ホーフマンスタール作『塔』についての批評等である。

1 『新しい天使』と『新ドイツ寄稿』

『ドイツロマン主義の芸術批評の概念』によって哲学博士の称号を得たベンヤミンに、1921年、自分の個人的方針を十分に生かし得る雑誌を発刊する可能性が訪れた。出版主ヴァイスバッハが全面的にベンヤミンをバックアップすることで、ベンヤミンが長い間抱懐していた希望が実現するかにみえた。ベンヤミンはこの雑誌を、クレーの一枚の絵の題名にちなんで、『新しい天使』と名づける予定であった。しかしこの雑誌は出版社の資金難のために実現の運びに至らなかった。出版の運びには至らなかったものの、ベンヤミンはこの雑誌に非常な熱意を注いでいる。ベンヤミンはこの雑誌の発行のために、雑誌というものの本質について思索し、その使命とそこから生まれてくるプランを『予告』と題して執筆している。

彼はこのなかで「雑誌の真の使命はその時代の精神を証言することである。」¹⁾と明快に言いきっている。そしてその目的のために雑誌にアクチャリティを要請している。しかし、ホーフマンスタールが自らの雑誌『新ドイツ寄稿』によって時代のなかにひとつの場所を与えようとしながらも、単なる同時代者性を求めなかったように、ベンヤミンも多数の読者大衆のもとでアクチャリティを測ろうとはしない。彼は必要ならば読者大衆を無視したところに、そして新しいもの顔をした表層の下にできあがっている真にアクチュアルなものをめざすと宣言する。雑誌の使命ということからうまれてくるこの方向規定は、ホーフマンスタールのめざすところと、選ばれたる少数者にその雑誌が向けられるという意味で、相似たものとなっていることが注目される。ベンヤミンはこの予告で1. 批評の重視、2. 言語そのものへの関心、3. ドイツ語の豊富化とそれの修練過程の重視を、誌上で展開することを予告している。これらの目標は、それぞれが平板な常識的理解とはきびしく対立している。まず批評について云えば、批評はすでに100年前からドイツでは不毛であるとベンヤミンは宣告する。批評のこぼを回復すること、「無効宣告をする批評」²⁾をベンヤミンは自らの批評の目標として掲げる。批評の任務は、「知識の伝授、比較による教養の伝達にはない。」³⁾作品に沈潜することによって批評を行なうことが求められる。そして「作品の真理性についてのその報告はまたそれ自身哲学的であるに劣らず芸術的でもなければならない。」⁴⁾ここであげられた批評の理想的あり方は実に要求が高いが、これはありうべき批評としてたんにその目標が提示されたというにはとどまらない。『新しい天使』のために準備した『ゲーテの親和力』論において、ベンヤミンは自らの要請、「作品の真理性についてのその報告は哲

学的であるに劣らず芸術的でもなければならぬ」という目標を実現しているのである。⁵⁾

ベンヤミンにおける言語の重視は、創作におけるドイツ語への注目というかたちであられる。ドイツ語に訪れている危機を鋭く意識していたベンヤミンは『新しい天使』で紹介しようとする詩及び散文作品は危機を意識したものでなければならぬとした。ドイツ語の危機は当然、翻訳の問題と触れ合う。翻訳によって危機の救済がはかれることがあるかもしれないからだ。ベンヤミンはそうした意味で翻訳という形式を重視する。ベンヤミンは雑誌の創刊号に自らの論文『翻訳者の使命』を掲載して、自国語の腐朽した枠をうち破る手段としての翻訳について語る予定をたてていた。

これらの点を重視しながら、雑誌というものの本質が要請するアクチャリティを追求すること、そして神の前で一瞬のあいだ歌をうたい終えるやいなや消えてゆく天使のイメージにならって、雑誌の使命を果たしてゆくことが雑誌創刊にのぞんでのベンヤミンの決意であった。そしてこの雑誌のためにベンヤミンは幾人かの寄稿者を選定していた。例えば創刊号のために用意した原稿は1921年11月8日のショレムあての書簡によれば、彼の亡くなった比類のない友人 F. ハインレの原稿、F. ハインレの弟の詩、ラング (Rang) の『謝肉祭』、アグノン (Agnon) の著作、それにベンヤミン自身の『翻訳者の使命』であった。

ベンヤミンの雑誌への寄稿者のひとりであるこのラングがはからずも、ベンヤミンをホーフマンスタールに紹介する人物となったのである。ラングは1905年以来ホーフマンスタールの友人であった。彼は1922年に出版されたホーフマンスタールの編集する雑誌、『新ドイツ寄稿』に『ゲーテの浄福なる憧れ』を寄稿している。ラングはあるとき、ベンヤミンの雑誌が資金難のために出版不可能になった事情をホーフマンスタールに語ったことがあった。ラングは『新しい天使』の計画が挫折したあとで、恐らくベンヤミンに対してホーフマンスタールの雑誌にあたってみることを勧めたと思われる。1922年10月14日のラングあての書簡にはすでにベンヤミンがホーフマンスタールの雑誌に寄稿することが考慮されている。しかしホーフマンスタールの『新ドイツ寄稿』自身もまた資金難のため、2号以下の出版が危ぶまれる状況にあった。ホーフマンスタールはラングにあてて、1922年11月7日の手紙で、「資金難のため、『新ドイツ寄稿』の出版継続ができるかどうかかわからない」⁶⁾と伝えている。

資金難の他に、『新ドイツ寄稿』には寄稿者の問題もあった。雑談の密接な協力者となるはずであったボルヒャルト (R. Borchardt)、R. A. シュレーダー

(R. A. Schröder) がホーフマンスタールと歩みを共にしなくなったことで、適当な寄稿者が求められていた。

このように財政上の問題、寄稿者の問題等で、ホーフマンスタールは雑誌の発行にあたっては、たびたびの困難にぶつかっている。雑誌がホーフマンスタールにとって「憂慮と幻滅の源」⁷⁾であったことが理解されるのである。にもかかわらずホーフマンスタールがこの雑誌の刊行を維持しつづけたのは、彼の作家としての責任感に拠るところが大であった。

すでに第一次世界戦争前から彼自身の精神的基盤の崩壊を秘かに予感していたとはいえ、ホーフマンスタールにとって戦後のヨーロッパの混乱は堪えがたいものであった。そこで戦後においてホーフマンスタールが一貫してとった姿勢は、精神の立場から時代に働きかけるということであった。『新ドイツ寄稿』の発刊もそうした努力の一環として把えることができるだろう。『新ドイツ寄稿』発刊にあたってはその姿勢は顕著に見てとれるのである。彼は雑誌の予告においてヨーロッパの現状と雑誌のめざす態度について読者に対して次のように書いている。「今日では多くの人々が気のきいたゼスチャーを好んでいる。しかしこれはそんなに簡単ではない。そうした態度のなかには、無節度と精神的放埒があらわれている。そうした態度を精神的情熱といつわろうとしている。—精神的情熱というものは世界でももっとも稀れで、しかも今日のドイツ人の下ではもっとも稀れなもの—そうした態度は無気力以外の何ものでもない。無節度と無気力がそのお気に入りのお伴である。しかし次のことが唯一重要であるように思われる。つまり困難で暗い状況のなかで総体性 (gesamtheit) を体現している精神的なひとびとがそうした状況のなかの個々のひとにとってもふさわしい態度と同一の態度をとるということである。」⁸⁾

ホーフマンスタールは、こうした意図をもって、ブレーマー・プレッセのヴィーガント (Wiegand) を出版人として、彼と密接に協力し合い、そして雑誌の寄稿者としては前述の二人を最も信頼しうる寄稿者として雑誌の発行に踏みきっていた。

ボルヒャルトと R. A. シュレーダーがホーフマンスタールから離れ出したことで寄稿者の点で窮状に陥っていたホーフマンスタールは、ラングにあてた書簡で『新しい天使』挫折の件とその編集予定者ベンヤミンのことを想起して「このひとは寄稿者として私の考慮に入るだろうか」⁹⁾と訊ねている。(1923年4月30日付け)

ラングはこの問いかけに対して、1922年11月8日付けの送付されなかった自

らのホーフマンスタールへの手紙を添えてベンヤミンの近況を伝えている。送付されなかったこの手紙には『新しい天使』が出版不能に陥ったこと、この雑誌の中核になるのは、ベンヤミン、ハインレ、ラング自身であること、そしてベンヤミンを『新ドイツ寄稿』に寄稿者として採用することを考えてほしい旨を記している。いったん書かれながら送付されなかったこの手紙はホーフマンスタールの照会に適合するものであったために、ラングはこれを添付したのであろう。その間の経過とベンヤミンの当時の状況についてはラングによって次のように報告されている。

(1923年5月3日、ホーフマンスタールあて)

ホーフマンスタール様

……さて、あなたは、特に私の友人ベンヤミンのことを出すことで、私に編集者としてのあなたを助けるという名誉を与えてくださっています。彼の住所は次のとおりです。ヴァルター・B博士、ベルリンーグラーネヴァルト、デルブリュック通り23。しかし彼は夏の学期のあいだおそらくフランクフルト大学に行っているでしょう。さて、ここでお互いの希望が親しく交差し合っています。私はあなたに私が送らなかった昨年11月8日に書いたあなたあての手紙を添付します。なぜ送らなかったかというこの手紙が書かれた瞬間にベンヤミンが私に彼の雑誌の出版に新しい見込みが生じた—これはまもなく完全にだめになりました—と伝えてきたからです。

.....

ごらんのとおりこの手紙で、ベンヤミンと私はすでにあなたの雑誌に向かいつつありました。しかしその間に変化ができました。つまりベンヤミンは他の方面であまりに忙しいので、彼が彼の雑誌で編集したいと考えていた計画を、たとえ短縮したかたちであれ、弱められたかたちであれ、規則的な寄稿によってあなたの雑誌で追求することは望めません。少なくとも今のところは……

.....

ベンヤミンが多忙にもかかわらず次号のために寄稿することができるかどうかは私にはわかりません。私は近いうちに彼に会って彼にたずねるでしょう。¹⁰⁾

この手紙に対してホーフマンスタールは、1923年の6月19日づけのラングあて書簡で、ラングとベンヤミンの協力を求めている。しかし今日から考えると実に面倒なことと思われるのだが、ホーフマンスタールはベンヤミンと彼の仲介をラングに依頼しているのである。

ラングはこの依頼を受けて、ベンヤミンの『ゲーテの親和力』の原稿を編集者として厳格に審査するようにホーフマンスタールに勧めている。(1923年6月25日付け)そしてラングは同年10月31日にベンヤミンの原稿と印刷物を送っている。

『ゲーテの親和力』がホーフマンスタールにどのような印象を与えたかは次に引用するホーフマンスタールがラングに寄せた書簡に明らかである。(1923年11月20日付け)それは手ばなしの讃辞といってよいものであった。

.....

あなたが親切にも私に託して下さったベンヤミンの本当に比類のない文章について詳しく述べることは、今は期待しないでください。私はただそれが私の内的生活に新しい時期を画したということ、私の思念は、自分の仕事が全注意を強制しないかぎり、その文章から離れることができなかったということを示しあげることができるだけです。私にとっては一みかけ上の《外面的》なことについて言えば—このうえもなくうまく秘密を突きとめる際の叙述の気高い美しさは驚くべきものです。この美しさは、私はその例を知らないまったくしっくりとした清らかな思念から出てくるものです。もしもこのひとが比較的若い、たとえば私より年齢が少ないひとだとすれば、私はこの成熟に驚くほかはありません。あなたとの深い関係が私をとらえました。もっともひどいところまで分裂した世界のなかでそのようなものを認めることは何という慰めでしょう。それゆえあなたを通じてこの仕事を『新ドイツ寄稿』に掲載するという(まず次号にⅠ章とⅡ章を、早急にそれに続く号でⅢ章を)許可を得られるなら、精神的なものを汲みあげることを知っているひとびとは、ただちにあなたの著作との関係をどうしても感じざるを得ないでしょう。それによって、私はそう希望するのですが、当時あなたがベンヤミン氏と共に作ろうとしていた自分たちの雑誌との関係において、あなたの前に浮んでいたものの本質的なものが達成されるでしょう。¹¹⁾

.....

『ゲーテの親和力』のなかに、ホーフマンスタールの近い友人ボルヒャルトへの批判があることを原稿を送る前から気づかっていたほどのベンヤミンが『新ドイツ寄稿』への掲載に同意したことは当然であった。

ホーフマンスタールとベンヤミンの直接の書簡往復の道はやはり高名なる文学者ホーフマンスタールがいまだ無名の作家ベンヤミンに書簡を寄せるとい

うかたちで開かれた。上記した書簡に先だって1923年11月18日のラングあて書簡でベンヤミンは「ホーフマンスタールからの最初の文章がうれしかった」¹²⁾と書き送っている。ベンヤミンがホーフマンスタールに最初の手紙を寄せた時期は1923年末である。こうしてはじまった両者の書簡のやりとりは、ベルリンにおける直接の面談も含め、ホーフマンスタールの死まで継続されている。

ホーフマンスタールによって絶讃されたベンヤミンの批評作品は翌年の1924年4月発行の『新ドイツ寄稿』第4巻、(Heft 4)に掲載される。ホーフマンスタールがラングに提案したとおり、第4号に第Ⅰ章と第Ⅱ章が載せられ、1925年1月発行の第5巻(Heft 5)に残りの第Ⅲ章が印刷された。今やベンヤミンの『ゲーテの親和力』について叙述されるべきであろう。

2 ベンヤミンの『ゲーテの親和力』

『ゲーテの親和力』はベンヤミンの書簡から推すると1921年の冬に集中的に仕事が進められ、1922年2月に完成している。彼はこの仕事を「批評の範例」¹³⁾、「純粋な哲学論への準備作業」¹⁴⁾とみなしていた。ベンヤミンは『新しい天使』の予告のなかで、作品に沈潜することによって作品を批評するというゆき方を提唱しているが、『ゲーテの親和力』はそれの実践であった。

ベンヤミンの博士号取得論文『ドイツロマン主義の批評概念』や『ドイツ哀悼劇の根源』が学問研究上の論文という強い色採を帯びているのに比較すると『ゲーテの親和力』は批評作品という性格を強く打ちだしている。そしてその一作品への沈潜度、さらにそこから展開される議論の徹底性を考えるとき、この作品は、ベンヤミンが後年雑誌等に執筆した書評、作家論にまさるベンヤミンの批評作品の白眉と言えるだろう。

ベンヤミンは博士号取得論文においてドイツロマン主義、特にF. シュレーゲルの批評概念を論じた。そしてF. シュレーゲルの批評の文学史的位を措定して、美学的独断論と懐疑論の克服をその功績とした。一方で外から何らかの美学的規準を持ちこむことを、他方天才崇拜にみられる批評における無規準を拒否けたことに、ベンヤミンはF. シュレーゲルの批評の独自性と文学史的意義を見たのである。F. シュレーゲルは批評を作品の自己認識とみなすが、それは作品のなかに批評の手がかり、萌芽があるということである。ベンヤミン自身も先に引用した自らのことばからも察せられるように、ゲーテの『親和力』を論ずるにあたって、このF. シュレーゲルの立場に立って批評行為を実践した。

『ゲーテの親和力』はベンヤミンの構想によって見れば、厳密に弁証法的に構成されている。作品のための覚書きには、第一部は「テーゼとしての神話的なもの」、第二部は「アンチテーゼとしての救済」そして第三部は「ジントーゼとしての希望」と銘うたれている。しかも三つの部分それぞれの冒頭には、ベンヤミンの抱懐する批評論が展開されている。

まず第一部冒頭でベンヤミンはコメンタールと批評を区別する。その区別を説明して、彼はコメンタールは作品の事実内容を、そしてクリティックは作品の真理内容をめざすとしている。しかしその際批評家が真理内容をめざすとしても、事実内容を批評家が無視してもよいというわけではない。「無数の事実内容の探査のうちに突如、批評の規準が生まれてくるのである。」¹⁵⁾

第二部冒頭では文学研究における伝記的方法の無効性がきびしくうちだされる。人生から作品を解明しようとする誤まったゆき方を批判し、作品は、人間の行為と同じく、何かあるものからひきださうものではないと彼は考えるのである。作品を看過して作者から出発するやり方では、作品の価値や特質の洞察だけではなく、その作者の人間や生への洞察も、同じように取り逃すことになる。「まず作者の人間については、作品解釈をおろそかにした認識はすべて、その人間の全体性、彼の自然 (Natur) という点からみて無効とされる。」¹⁶⁾

批評がこのようにも困難な行為であるとするならば、批評は作品の美といかなるかたちで関わってゆけばよいのだろうか。第三部の冒頭でベンヤミンはこの問いに答えている。

批評が作品を毀損することなしに芸術作品の秘密を探ろうとする場合にベンヤミンが提示する方法は、芸術作品のきょうだいを探すことである。ベンヤミンはそのきょうだいを哲学の領域に求めようとする。「芸術作品はそのきょうだいを哲学の領域にもっている。それらはまさしく哲学の問題の理想 (Ideal) がそのなかに現われる具体的形姿なのだから。」¹⁷⁾

従来の文学研究のあり方に鋭い批判を加えながら、自らの芸術批評の理論を以上のように定着したベンヤミンの『ゲーテの親和力』が真理内容を追求したクリティックをめざしていることは言うまでもない。

『親和力』の主題は、多くの研究者たちによって「結婚」であると説かれてきた。結婚の道徳的性格についてまことしやかに吹聴するミットラーの品のないおしゃべりをゲーテの立場と同一視する解釈すらもなされてきた。しかしベンヤミンによれば、『親和力』のテーマは結婚ではない。結婚の倫理的力はこの小説にあってはすでに消え失せている。「結婚はここでは倫理的問題にも、また

社会的問題にもなっていない。つまり結婚は市民的な生活方式になっていないのだ。むしろ結婚の解消のなかにすべてヒューマンなものが姿をあらわし、そして神話的なものだけが、本質として存続しつづけている。」¹⁸⁾『親和力』の主要人物四人は例外なく神話的な秩序の呪縛のなかにある。彼らは破滅の運命に定められている。彼らに倫理的罪があるから運命があるのではない。結婚の崩壊を阻止しえないこと、オッティリエがエドゥアルトと結びつくことが問題とはなっていないのである。ここで問題になっているのは、「決意とか、行為によらずに、怠情と無為によって人間たちがおちいる自然的罪」¹⁹⁾である。「人間たちが人間的なものに留意せず、自然力のとりこになるとき、自然の生は、それが、あるより高き生と結ばれていないかぎり、人間のなかに無罪を保持することはできず、むしろそれをひきさげることになるのだ、人間のなかにある超自然的な生が消失すると、人間の自然の生は、行為において倫理に違反することがなくても、罪あるものとなる。なぜならば、自然の生とは赤裸な生と結びついていて、この結びつきが人間にあっては罪として現われるからだ。」²⁰⁾

このように『親和力』の四人の人物たちが運命の手中にあって破滅してゆくのに対し、『親和力』に挿入された『ノヴェレ』の若者たちは救済のヴィジョンを提示している。ベンヤミンは第2部においてグンドルフの『ゲート』における方法を徹底的に批判しつつ、自らは作品に即しつつこの『ノヴェレ』の意味を適格に、絶妙に把握している。

『親和力』のロマン形式は、そのなかに挿入されたノヴェレによって、そのロマン的性格を補正されている。それはノヴェレがロマンとの対立性をきわだたせているためである。ここに登場するロマンとノヴェレの人物達も同様にお互いにきわだった対立を示している。シャルロッテと大尉の一组をエドゥアルトとオッティリエの一组の男女と対立的に考える解釈が多いけれども、ベンヤミンはこうした解釈をとらず、彼らが四人とも心の怠情のせいで神話の圏内にとらえられたままであるとみなす。「自由と運命の彼岸に立っている」²¹⁾ノヴェレの男女こそが、これら四人の人物たちときわだった対照を示しているというのがベンヤミンの指摘なのである。こうした意味でベンヤミンは『親和力』の構成においては、ノヴェレに支配的な重要さがあたえられているとみる。そしてロマンとノヴェレの対応関係を次のように結論づけている。「だから小説では、神話的なものが命題と見なされるとき、ノヴェレにはその対立命題がみとめられうる。ノヴェレの表題はこのことを暗示している。すなわちあの隣り合った子供たちがつとも『不思議に』見えるのは、小説の人物にとってであるにち

がない。かれらは結局、深く傷ついた感情をいだいてノヴェレの人物たちに背を向ける。」²²⁾

『親和力』が神話的なものを基盤としているとみなすベンヤミンは、この神話的なものから生まれていることをもつともはっきりと体现しているオッティリエを中心として哲学的考察を展開する。彼は問うている。「幸福にあづかったような無邪気さとも、曖昧な犯し難さとも、同じようにほとんど無関係な、あの純粋な自然のままの無垢に、オッティリエという人間はかかわっているのだろうか……彼女には性格があるだろうか。彼女の天性は、固有の卒直な心よりもむしろ自由な開かれたことばのおかげで眼前にほうふつとするのだろうか。」²³⁾ ベンヤミンの答えはいずれの問いに対しても否定的である。オッティリエの純潔さは人工的なものであり、「ほとんど論理的に、自由と関連している」²⁴⁾と言われた性格にはなっていないし、彼女の存在を支配しているのは、「植物的寡黙さ」²⁵⁾である。オッティリエは聖なるものと呼ばれることがあるが、当然、ベンヤミンはこの見解に組しない。オッティリエは「外からみても内的な発展においても、死にいたるまで運命の力に服従したまま決断もなくその生を送っている」²⁶⁾のだが、しかし、たとえばグンドルフのように、「オッティリエの形姿は『親和力』の主要人物でもなく、真の問題でもない」と主張するのは正しくない。まさしく「しんじつひとりの滅びゆく女性を救い出し、彼女のなかにひとりの恋人を救済するために、ゲートをこの小説の世界に呪縛したのは、オッティリエの形姿であり、その名前に他ならない」²⁷⁾のだから。『親和力』の恋人たちにたとえ救済が、真の和解がないとしても、しかしそれではまったく希望はないのであろうか。ベンヤミンは『親和力』のなかのすばらしい一文、「希望は、天から降る星のように、ひとびとの頭上を通りすぎていった。」に読者の注意を向けさせる。しかしながら、「最後の希望がそれを抱くひとのためではなく、その希望が向けられている人びとのためにある」²⁸⁾のなら、ゲートが恋人たちに寄せる希望の感情をそれは明らかにしていないだろうか。論文の最後でベンヤミンは言う。「ただ希望なきひとびとのためにのみ、希望はぼくらにたえられているのだ。」²⁹⁾と。

3 『ドイツ哀悼劇の根源』をめぐる

ベンヤミンの期待に反して、『ゲートの親和力』の反響は香ばしくなかった。しかしこれを機会にホーフマンスタールの知遇を得たことが、ベンヤミンの将来の活動にとってきわめて有利な展望を開いたことも事実であった。ベンヤミ

ンはさしあたってこの高名な作家のベンヤミン礼讃の手紙を証文として父親からの経済的援助をひきだすことができた。生業をもたず、両親からの援助と妻の英語翻訳による収入によって戦後のインフレーションを何とかしのいでいたベンヤミンは、両親からの援助をひきつづき確かなものにするためにも何か「公的な高い評を証明するもの」³⁰⁾が必要であったが、ホーフマンスタールの手紙もまたこうした証明のひとつであったろう。経済的問題でたえず対立をくり返していた父親の意に添うために、しかしベンヤミンが計画したのは大学の教職を得ることであった。ホーフマンスタールとの文通がはじまった時期、ベンヤミンは大学教授資格を取得して大学で働く道を目指していた。1923年にはフランクフルト大学で教職を得る見込みが開けそうになったので彼は当時すでに教授資格審査論文に着手していた。その論文が『ゲーテの親和力』に次いでホーフマンスタールとの交渉の焦点となる『ドイツ哀悼劇の根源』であった。

一方ホーフマンスタールはこの時期、1924年に、「哀悼劇」と銘打った『塔』を書きあげ、翌年にその第一稿を発表している。同じような時期に、創作と学術論文というちがいはあれ、両者がバロック期の文学形式と格闘していたという事実はさまざまな意味で興味深い。

1925年には両者の関係は、ホーフマンスタールが『塔』の書評を他ならぬベンヤミンに依頼したこと、さらにははじめリルケに依頼されるはずであったサン・ジャン・ペルス (S. J. Perse) の「アナバーズ」(Anabase) の翻訳という仕事が、ホーフマンスタールの仲介によってベンヤミンにまわされたということにより緊密化する。そしてホーフマンスタール自身は、ベンヤミンのために、大学教授資格審査への助力、さらにはローヴォルト (Rowohlt) から出版された文芸誌『文学世界』(Literarische Welt) へベンヤミンが寄稿できるように援助を惜しまなかった。ホーフマンスタールは、ジャーナリズムデビュー当時のベンヤミンにとっていはばパトロンのおき存在であった。

さて『ドイツ哀悼劇の根源』は1925年春までには完成している。ベンヤミンは1925年6月11日付けのホーフマンスタールあての手紙で、この原稿を同封したことを伝えている。教授資格審査用の論文として書かれたこの論文が、学界関係者にはほとんど理解されず、ベンヤミンがフランクフルト大学からこの論文の却下を求められたことはよく知られている。しかしこの論文の出来栄に賞讃を惜しまなかった数少ない有識者もいた。ホーフマンスタールがそのひとりであった。ホーフマンスタールの絶讃ぶりを伝えるベンヤミンの手紙を引用しよう。

「ぼくの論文のコピーをもっているホーフマンスタールが、それをヴィーン大学のドイツ文学の教授、ブレヒトに見せた。……ブレヒトはぼくの論文を絶讃して、どの出版社あてにでも推薦状を書く用意があるといったという。同じことをホーフマンスタールも、じつに親切的な積極的な手紙で申し出ている。折りを見てこの手紙の写しをきみに送ろうか。かれはぼくの推論がかれ自身の試行の根柢と触れ合っていると述べ、好意的なすばらしいことばを連ねて、論文が多くの段落において絶品であると言っている。」³¹⁾

論文に感激したホーフマンスタールは、後に自らの主宰する雑誌『新ドイツ寄稿』に「憂鬱」をとり扱った部分を掲載することにした。

『ドイツ哀悼劇の根源』は、ベンヤミン全集の作品成立年表には1923年3月にはじめられ1925年春に完成と記されている。しかし腹案がこの時期よりはるか以前にさかのぼることはベンヤミン自身の記述によっても知られる。³²⁾

論文は内容構成の面からみると二つの部分に分かれている。そしてこの二つの部分に先だって、ベンヤミンはきわめて難解と称される序言を置き、ここで自らの抱懐する方法論を縦横に論じている。「認識批判的序説」と題されたこの序言において、ベンヤミンは、理念としての哀悼劇ということを強調する。これはしかし帰納的に導き出されるものではない。それゆえ例えば R. M. マイヤーの方法、ジャンルをひとまず所与のものと同前提しておいて、それから各ジャンルの傑作を比較して個々の作品をはかる尺度となる規則、法則を得ようとするやり方とは、これはきびしく対立する。ベンヤミンはこうした抽象化の方法と結びついた帰納的方法からでてくるジャンル概念に反発し、ジャンルを認めようとしなかった B. クローチェの立論にむしろ好意的である。しかしベンヤミンによれば、クローチェのジャンル概念に対する非難は、個々の作品に執着するという面で正当であるが、しかし芸術哲学は悲劇的なもの等の豊かな理念なしでは必須のものを欠きはしないかと考慮される点で、その非難はゆきすぎているのである。しかし「美学上の術語からその最良の表現を奪いとり、芸術哲学を沈黙に追いこむラディカリズムはいうまでもなくクローチェの最後の結論ではない。」³³⁾ クローチェが「発生的分類」と名づけている考察が、根源の問題における芸術の種類についての理念論と一致することを、ベンヤミンは指適している。重要なことは一方での作品への執着、そして他方における本質としての理念とのあいだのその独自の関係を考察することである。「根源」というカテゴリーにはそのようなベンヤミンの洞察が含まれている。ベンヤミンによれば根源は発生とは何の共通点ももたない。「根源はなるほど全く歴史的な範疇ではあるが、

発生ということとはなんの共通点もない。根源においては、発生したものの生成ではなくて、むしろ、生成と消滅の中から発生してゆくものが問題になるのである。根源は、生成の流れにおける渦であり、発生の素材を自己のリズム体系の中にまきこんでしまうのである。根源的なものは、むき出しの、あらわな事実の山の中に、その真の姿を見出せることは絶対にない。そのリズム体系は、二重の洞察によってのみうかがい知ることができる。その本質は、一方では復古、復元であり、他方ではまさに復古、復元における未完成、未完結であることが明らかにされなければならない。どの根源的現象においても、理念が歴史的世界と幾度となく対決するときの形姿が決定されるのであるが、最後には、理念はその歴史の総体のなかにおいて完成した姿で現われる。したがって根源は事実見られた通りの世界からきわだつことはなく、この事実の世界の前史および後史にかかわるのである。」³⁴⁾

この序論においてベンヤミンはまたドイツバロック研究の歴史を概括し、これの貧困の原因を探ねている。ドイツ文学研究の分野ではバロックの研究は立ち遅れたが、ベンヤミンは、その原因のひとつを伝統的ゲルマンスティックが文体分析や形式分析をまったくおざりにしたことにあるとみる。民族主義的思潮のなかで仕事をしてきた文献学者がほとんどドイツの伝説も歴史も現われてこないバロック演劇を等閑視してきたのは必然的であるにしても、ドイツ文学研究の間口が広がったという事情も、それが形式分析や形式史に注意を払わなかったので、バロック研究にはほとんど役立たなかった。しかし「すべてのバロック悲劇の要諦は、形式にあるのだ。」³⁵⁾

バロック演劇の研究が進められなかったもう一つの原因は当時の演劇論に固執したことにあつた。当時の演劇論はアリストテレスの演劇論を同時代的に適用したものであつたから、こうした見地からは、バロック演劇は古典ギリシア悲劇の拙劣な復興ということになった。そのような拙劣とみなされる対象に人気ができるはずもなかった。

しかし時代は変わりバロック演劇が生まれた背景ときわめて類似した状況がうまれた。ベンヤミンはバロック演劇と表現主義演劇の類似性を指摘する。彼は両者の類似性をとくに言葉の面にみている。「とくに言葉の面での当時の腐心ぶりは、そのまま最近および現在の状況に酷似している。強引さが両者の特徴である。」³⁶⁾このような強引な表現をうみだす共通の時代背景を「意欲」の時代と彼は呼んでいる。「表現主義と同様、バロックも本来の意味での芸術的習熟の時代ではなく、むしろ一心不乱な芸術的意欲の時代である。」³⁷⁾

しかしその類似性にもかかわらず両者の差異も無論存在する。バロックにあっては、文芸は国家の新生のための重要な意味をもっていたが、「ここ二十年間の文学は、たとえそれが何かを準備し、胚胎するものではあっても、ひとつの凋落にすぎない。」³⁸⁾

ベンヤミンにとって、ドイツバロックの哀悼劇の研究は単なる好事家的興味からなされたものではなかった。革命思想を奉ずる、例えば A. ラチス (A. Lacis) 等の目には、バロック劇の検討などは死んだ文書との関わり合いとしてまったく軽蔑の対象であったであろうが、ベンヤミンにあっては、一見死んだ文章との関わり合いの背後に当代の表現主義文学との呼応が捕捉されていたのであった。

『哀悼劇と悲劇』の部分で、ベンヤミンは両者を厳密に区別している。彼は哀悼劇を悲劇の拙劣な歪曲された亜流とする見方を拒否するのである。ベンヤミンによれば、17世紀のバロックは、俗論とはちがって、アリストテレスの悲劇論の影響をほとんどうけなかった。アリストテレスの悲劇論は、権威づけのために利用されたにすぎなかった。それでは哀悼劇と悲劇を区別する根拠は何であろうか。ベンヤミンはその差異を哀悼劇が歴史を内実とするに対し、悲劇が神話を内実としている点に見ている。もしも哀悼劇と悲劇の共通点を探すとすれば、中心になる登場人物が王であるという点だけである。それゆえベンヤミンはまず王についての考察から始める。バロックにおける王は専制君主と殉教者というヤヌスの人物である。「王の緋衣と血の深紅色が同じ謎めいた人物のうちでまじり合う。」³⁹⁾そしてこの融合の背後にあるのは、キリストの王者性と殉教である。ベンヤミンは哀悼劇のこのような性質を指摘して、哀悼劇が悲劇から派生したと見るのではなく、これを中世における受難劇と関連づけて考察している。バロックに委ねられた仕事は、「現在の力を古典古代という媒体を通して看破することであった。だからこそバロックは、自己の諸形式を『自然に即したもの』として見、ライヴェルである古典古代と対立するものとしてではなく、むしろそれを克服し、高めるものとして見ることができたのである。バロック悲劇の凱旋車では、古典古代の悲劇は、鎖につながれた女奴隷なのである。」⁴⁰⁾

哀悼劇と対比させて論じられる悲劇とは、それではベンヤミンにおいてどのように把握されているだろうか。彼は前半の部分でドイツにおける代表的悲劇論に言及し、その不十分さを指摘している。ベンヤミンはそこでギリシア悲劇の歴史哲学的意味合いを強調する。

フォルケルトの「悲劇的なもの」では歴史哲学的側面がまったく捨象されている。悲劇の道徳主義的解釈を拒絶したニーチェも「悲劇の本質についての究極の判断が表現される歴史哲学的ないし宗教哲学的諸概念に到達することはできなかった。」⁴¹⁾ ショーペンハウアーにあつては、ギリシア悲劇と哀悼劇のちがいが曖昧にされている。

これらの思想家の非歴史的悲劇論に対して、ベンヤミンは、悲劇における主人公が同一の悲劇的自我であることを指摘したローゼンツヴァイクの功績を高く評価している。

ベンヤミンによれば、悲劇文学は犠牲の観念の上になつており、主人公の寡黙性、沈黙性をその特徴にしている。

哀悼劇がこのような特徴を具えた悲劇の伝統と切れているとすれば、その切断面はどこに求められるだろうか。この問いの時点でソクラテスの姿がうかびあがってくる。哀悼劇が殉教者劇としての側面をもっているとすれば、ソクラテスの死がギリシア精神におけるひとつの転機である。ソクラテスの死において悲劇は終り「ギリシア悲劇のパロディとしての殉教者劇が生まれるのである。」⁴²⁾ ベンヤミンは「饗宴」における対話をとりあげて、その言葉に哀悼劇の言葉の由来を求めている。

前半部分の最後でベンヤミンは特に憂鬱質についての論述を展開している。というのも、ベンヤミンによれば、憂鬱者を論ずることは哀悼劇への「最も良い註解」となるからである。ベンヤミンは中世における憂鬱についての理論と対比させて古典古代、ルネサンスにおける憂鬱論の弁証法的把握のしかたをとりあげる。彼は憂鬱と占星術、とりわけ憂鬱と土星の密接なつながりを「土星が憂鬱同様、魂に一方では不活発と鈍感を、他方では知力と瞑想力を与える」⁴³⁾ 点に認めるのである。

憂鬱者像というものには心の怠惰（アケーディア）という概念が結びついている。哀悼劇にあらわれる専制君主は心の怠惰のために身を滅ぼす。しかしまた王の廷臣もまた憂鬱な気持のままにたやすく王を裏切るのである。しかし廷臣たちの人間に対する「不忠の裏には、これらの物に対する瞑想的な帰依としかいいようのない忠誠がある。」⁴⁴⁾ ベンヤミンは憂鬱から生ずる行動を次のようにとらえる。そしてこの見方はさらに後年の包括的なボードレールをめぐる著作にまで延びてゆくモチーフである。「憂鬱は知のために世界を裏切る。しかし憂鬱はその瞑想の長い沈潜のうちに、死物を取りあげて救い出す。」⁴⁵⁾

しかしベンヤミンによれば、こうした憂鬱者の対立的あり方を舞台上で実現し

たのはドイツバロックではなかった。というのも「反宗教改革特有の反動的態度で類型形成にあたってドイツ哀悼劇は、中世という学校で教えられた典型的憂鬱像に常に従っているからである。」⁴⁶⁾

『アレゴリーと哀悼劇』と題した『ドイツ哀悼劇の根源』の後半部分では、ベンヤミンはとくにアレゴリーの復権をめざしている。彼はここでドイツ古典主義におけるアレゴリーの軽視（つまりこれは古典主義以降のドイツ文学研究史におけるアレゴリーの軽視ともなるのだが）に対して、アレゴリーを対置させてまさに同程度に強力なものとして象徴に対抗することができることを論証しようとした。寓意が芸術家、研究者によって軽視されてきた継過をベンヤミンはゲーテやショーペンハウアーのアレゴリー観を紹介して明らかにしている。寓意は、ベンヤミンの言うところにしたがえば、「遊び半分の比喩の技術ではなく、言語のように、いや文字のように表現である。」⁴⁷⁾

寓意に対して象徴は古典主義においても秘法的に重視された。寓意が象徴に対してそのライヴアル的特性を持つとすれば、それはどのように定式化されるであろうか。ベンヤミンは次のような定式化を与える。つまり象徴においては「没落の美化とともに変容した自然の顔貌が救済の光の下で一瞬その姿を現わす。」⁴⁸⁾ これに対して「寓意においては歴史の死相が凝固した原風景として見るものの目の前にひろがっている。」⁴⁹⁾

歴史はバロックの舞台では具体的には、廢墟として現われる。「物の世界における廢墟に対応するものが観念の世界ではアレゴリーである。」⁵⁰⁾ 寓意家における廢墟崇拜はこうした意味で偶然ではなく、廢墟への好みは、そこに残された意味深い断片、破片愛好へとつながっている。物的なものの重視、断片への愛好は、ベンヤミンによれば、まさしくバロックにおける手法としてのアレゴリーの特徴なのである。

ところで寓意的表現に無理解であったドイツ古典主義者たちに対して、手法的にアレゴリーの領域に通ずる手法を用いていたのは誰であろうか。ベンヤミンによればそれは前期ロマン派である。このような指摘によっても、この『ドイツ哀悼劇の根源』がバロックの再評価、アレゴリーの復権等の目論見を含みながら、一方でベンヤミンの博士号取得論文『ドイツロマン主義の批評概念』において示された前期ロマン派への関心が流れこんでいることも注意されてよい事実であろう。

4 ベンヤミンによる作家ホーフマンスタール評

「この論文でなら六人の教授資格がとれよう」⁵¹⁾というベンヤミンの自負とホーフマンスタール等の絶讃にもかかわらず、結局、彼はフランクフルト大学から論文の取り下げを求められた。1925年8月2日の手紙によれば、ベンヤミンはホーフマンスタールに対しても、フランクフルトで教職につく見込みがなくなったことを伝えている。

さてこれより先、1925年の4月6日付けのショレムあて書簡によれば、ホーフマンスタールがベンヤミンに自らの哀悼劇『塔』の評価を依頼している。ホーフマンスタール側からのベンヤミン評がこれまで主として扱われてきたが、ここでベンヤミンによるホーフマンスタール作品の評価という興味深い課題が現われてくる。この依頼はベンヤミンが1926年4月9日の『文学世界』に『塔』についての最初の書評を掲載するというかたちで実現した。ベンヤミンはさらに1928年3月2日の『文学世界』誌で再び『塔』（舞台用脚本として前者が改作されたもの）の書評を執筆している。

最初の書評では、ベンヤミンは、『塔』が17世紀の哀悼劇の伝統を受けつぐ作品であることを強調している。そして『塔』がカルデロン『人生は夢』の改作であるという事態にも、この哀悼劇の精神に拠って素材からロマン主義的色彩をはがしてしまったドイツ演劇の伝統を見るのである。

第二番目の書評においてもベンヤミンは自らの論じた哀悼劇論で展開した哀悼劇の特徴を生かして『塔』最終稿の特色を次のように性格づける。「キリスト教的哀悼劇の意味での殉教者の純粹な特徴が、ますますはっきりと造形化を要求し、それとともに、夢のモチーフが後退し、ジギスムントをめぐるアウラがますます明るくなった。」⁵²⁾ベンヤミンはこの特色を言語の面と筋の変化という面から、『塔』第二稿と最終稿を比較して後者の完成度を賞讃する。そしてその書評を終えるにあたって、ベンヤミンは、本来なら数十年を要する転化の内的必然性を、第二稿から最終稿までのわずか数年の間に現実化したホーフマンスタールの詩人としての偉大さを賞揚しているのである。

この二つの書評ともホーフマンスタールの賞讃に終始していると言えるだろう。しかしホーフマンスタールの後期作品に対するベンヤミンの評価はこの書評だけでは簡単にうかがい知れない微妙な部分がある。書簡や友人の証言によっても、ベンヤミンのホーフマンスタールへの尊敬の念、外交的配慮は明白なのであるが、それは必ずしも彼の晩年の作品に対する価値評価とつながっているとはいえないところがある。

ショレムは『W. ベンヤミン—ある友情の歴史』において、きわめて冷淡に両者の関係を扱っている。そしてベンヤミンのホーフマンスタール評価がきわめて低かったような印象を与える記述をしている。「書簡集が証拠だてているようにベンヤミンを高く評価し、ドイツの有名作家のうちでただひとりかれのために大いに尽力したホーフマンスタールは、苦心の戯曲『塔』の第一稿をかれに送ってきた。ベンヤミンはある書評でそれを詳細に扱ったが、わたしにはこう書いてよこした。『ぼくはまだあれを読んでいない。読むまえから、ぼくの私的判断は決まっているし、評論家としてのぼくのこれとは反対の判断も同様だ。』ここからは、両者の関係の外交的側面が仄見えてこよう。」⁵³⁾

1940年5月7日付けのベンヤミンからアドルノに送られた書簡から見ても、ベンヤミンが後期のホーフマンスタールについて厳しい批判をもっていたことは否定できない。

しかしその批判は、既に早熟の花を枯らして今は実質のともなわない文壇の権威となった作家といった冷酷な判断ではない。

1929年、ホーフマンスタールの死亡を滞在先のイタリアで知ったベンヤミンは「ドイツの追悼のあつかましさは嫌悪すべきものだった」⁵⁴⁾とショレムに書いている。そしてその死亡がベンヤミンの内部でかなり複雑な動揺をひきおこしたことを「ホーフマンスタールについてぼくは何も書かなかつたし、何も書くことができなかつた。」⁵⁵⁾という言葉で表明している。

1930年、S. フィッシャーから出版された『ロリス、若いホーフマンスタールの散文』に関する短かい書評、『ホーフマンスタールの命日のために』においても、ベンヤミンは、公衆も批評家もホーフマンスタールに対していかに不当であったかを説いている。大衆はホーフマンスタールの作品における世慣れたもの、享樂的なものにだけしがみついている、「創造的復古」のプログラムのために作られた大きな仕事を顧みることをしなかつた。そしてかつての芸術上の同志たちもホーフマンスタールに対してきわめて冷淡であった。ベンヤミンは、同時代がホーフマンスタールに投げかけた冷淡なまなざしがいかに不当であったかを特に「ロリス」の比類のない姿のなかに見ようとする。「ホーフマンスタールは彼の同時代者の悪意に無抵抗に身をさらすのだが、彼らのどの悪意の射撃も一発として彼に命中しない」⁵⁶⁾と、ホーフマンスタールとの乖離を指摘する。そして世人の不当な無理解や冷遇にもかかわらず、美しく屹立するホーフマンスタールを評して、「苦しみにみちた不遇によって美しくなるのがホーフマンスタールの姿なのである」と云う。しかし一方でまたその作家存在が孤絶し

ているのが、ベンヤミンによって捕えられたホーフマンスタールのひとと作品であるのだろう。彼はこの短い書評の冒頭でホーフマンスタールと後世の関係を総括的に表現する。「模倣されないということ、そして継承されないということが、たとえ高貴なものの本質一般に属するとは云えないでも、それが確かに、高い程度において、ホーフマンスタールが、初期から成熟した時代までのさまざまに移り変わる彼の存在と作品において明確にしたものである。」⁵⁸⁾

ここではベンヤミンが一般読者のホーフマンスタール評ともゲオルゲ・サークルの評価とも離れた地点でホーフマンスタールをみていたことがわかる。しかし批判的でないわけではないから、ホーフマンスタールへの関係は複雑であったと云わざるをえない。

ところでホーフマンスタール自身はというと、生涯にわたって彼はベンヤミンの才能を開花させる努力を惜しまない。ベンヤミンの依頼を受けられ、その計画の実現へと彼を促すのである。教職を得る試みが失敗したあと、ベンヤミンの経済生活安定の試みはジャーナリズムでの活動、さらにはショレムからもたらされたイェルサレムでの就職運動ということになったが、いづれの試みにおいてもホーフマンスタールはベンヤミンをさまざまの形で援助した。そしてベンヤミンは自らの執筆活動の内容をホーフマンスタールに恭やしい筆づかいで報告し、そのなかで自らの興味と試行の最も本質的な部分を開陳している。晩年のベンヤミンの最も重要な執筆課題となった『アーケード論』もいくたびもホーフマンスタールあての書簡で言及される。そしてベンヤミンの内部でこの『アーケード論』と競合するかたちになったパレスチナ行きの計画にあたっては、ホーフマンスタールもその計画の実現に助力し、イェルサレム大学関係者に手紙を寄せることも辞さなかった。これらの事実は、ホーフマンスタールがその死に至るまでベンヤミンに寄せた関心と期待が並々ならぬものであったことを証するものであろう。

エピローグ

1929年ホーフマンスタールの死によってベンヤミンとホーフマンスタールの交渉と書簡の往来も終焉を迎えた。ホーフマンスタールは終始年若いベンヤミンに讃辞を呈しつつけた。それはホーフマンスタール個有の批評的感性性一対象の長所を発見しそれを感応する能力—にも由来するだろうが、何よりもベンヤミン自身の能力がひき出したものであった。

ベンヤミンのホーフマンスタール評価が複雑なニュアンスを帯びていること

は前述した。ホーフマンスタールの死後、ベンヤミンは、前述した『ホーフマンスタールの命日のために』の他、1937年にホーフマンスタールの書簡集（S. フィッシャー1935）についてのごく短い書評を寄せているが、これは書簡集の簡単な紹介にすぎない。ベンヤミンの場合と同じくホーフマンスタールが教授資格審査にあたって、ヴィーン大学から論文を取り下げた事態に言及されているのが興味深い。ホーフマンスタールについて重要なことは述べられていない。むしろ注目されるのは、先に紹介した1940年5月7日付けアドルノあての書簡である。しかしこの書簡にしてもベンヤミン自身が危惧の念を抱きつつ自らのホーフマンスタール評を記しているのだから、ベンヤミンが決定的に、十分に自らの所論を展開した文章とは言えない。

しかしそれにしてもこのホーフマンスタール評は厳しい。そこではホーフマンスタールは「チャンドスの手紙にかいまみられる課題から身をそむけた」⁵⁹⁾ として「意志のちょっとした発現、献身というたったひとつのモメントを欠くばかりに至高のものにあづかれぬ男」⁶⁰⁾ としてホーフマンスタールの文学的、そして倫理的挫折が語られている。後者の文章は1926年の『塔』の書評においても司令官ユリアンの性格づけに使用されている。そこでは無論、ベンヤミンはそれがホーフマンスタールの自画像だなどと述べるはずもない。しかしアドルノあて書簡では、ユリアンはホーフマンスタールの自画像だと明言している。『塔』の書評においては明言を避けたにしても、ベンヤミンの胸中では、ユリアン＝ホーフマンスタールはすでに当時から去来していたのだろう。もはやホーフマンスタールを傷つける恐れがなくなったとき、それは明瞭なかたちで表現されたわけだろう。たしかにベンヤミンはホーフマンスタールの、特に後期の作品についてはさして高い評価を与えていなかったように思われる。しかし彼のホーフマンスタール評価は、一般のドイツの読者層の、あるいは最近の幾人かの歴史家たちのそれとは異なっていた。彼らはホーフマンスタールの後年の作家活動がナチズムの騒々しい大言壮語と親近性を有しているかのごとく述べたてるが、この見解には、ベンヤミンとともに筆者自身も賛成しがたい。ホーフマンスタールの後年の作家活動の成功、不成功いかにかわらず、そしてホーフマンスタールの活動がいかにか時代錯誤であったにしろ、孤立したひとりの保守的作家の存在も受け入れられないほどにベンヤミンの器量は狭くはなかったと、筆者には思えるのである。

註

- 1) Benjamin, Gesammelte Schriften (以下G. S.と略) Bd. II, 1, S. 241
- 2) ebenda S. 242
- 3) ebenda
- 4) ebenda
- 5) 叙述の美しさについては、ホーフマンスタールの絶讃がこれを証している。
- 6) Hofmannsthal/Rang, Briefwechsel, S. 420
- 7) Volke, Hofmannsthal, S. 143
- 8) Hofmannsthal, prosa IV, S. 143
- 9) Hofmannsthal/Rang, Briefwechsel, S. 424
- 10) ebenda, S. 425f
- 11) ebenda, S. 440
- 12) Benjamin, Briefe 1, S. 312
- 13) ebenda, S. 281
- 14) ebenda
- 15) Benjamin, G. S. Bd. I, 1, S. 125
- 16) ebenda, S. 156
- 17) ebenda, S. 172
- 18) ebenda, S. 131
- 19) ebenda, S. 139
- 20) ebenda
- 21) ebenda, S. 170
- 22) ebenda, S. 171
- 23) ebenda, S. 175
- 24) Benjamin, G. S. Bd. II, 1, S. 178
- 25) derselbe, G. S. Bd. I, 1, S. 175
- 26) ebenda, S. 176
- 27) ebenda, S. 199
- 28) ebenda, S. 200
- 29) ebenda, S. 201
- 30) Benjamin, Briefe 1, S. 293
- 31) ebenda, S. 393
- 32) Rowohlt から出版された同書の初版には、巻頭に1916年に構想され、1925年に書きあげられたと記されている。
- 33) Benjamin, G. S. Bd. I, 1, S. 225
- 34) ebenda, S. 226
- 35) ebenda, S. 230
- 36) ebenda, S. 235

- 37) ebenda
- 38) ebenda, S. 236
- 39) Steiner, Foreword of 'The Origin of German Tragic Drama', S. 16
- 40) Benjamin, G. S. Bd. I, 1, S. 278
- 41) ebenda, S. 283
- 42) ebenda, S. 292
- 43) ebenda, S. 327
- 44) ebenda, S. 333
- 45) ebenda
- 46) ebenda, S. 334
- 47) ebenda, S. 339
- 48) ebenda, S. 343
- 49) ebenda
- 50) ebenda, S. 354
- 51) Benjamin, Brief 1, S. 376
- 52) ベンヤミンの最初の書評は、ミュンヘンのプレーマー・ブレッセ書店から1925年に出版された。ホーフマンスタールには、これとほんの少し内容のちがう『新ドイツ寄稿』に発表された『塔』がある。後者を初稿とした。したがって初めの書評が扱うものを第二稿とした。
- 53) Scholem, Walter Benjamin, S. 159
- 54) Benjamin, Brief 2, S. 499
- 55) ebenda, S. 502
- 56) Benjamin, G. S. Bd. III, S. 251
- 57) ebenda
- 58) ebenda, S. 250
- 59) Benjamin, Brief 2, S. 852
- 60) ebenda

書誌

1. 本稿に関連したベンヤミンとホーフマンスタールの著作と書簡
 - Benjamin : Goethes Wahlverwandtschaften (Gesammelte Schriften Bd. I), Frankfurt a. M. 1979
 - derselbe : Ankündigung der Zeitschrift ; Angelus Novus (Gesammelte Schriften Bd. II), Frankfurt a. M. 1977
 - H. v. Hofmannsthal : Neue deutsche Beiträge-Ankündigung (1922), prosa IV, Frankfurt a. M. 1966
 - derselbe : Neue deutsche Beiträge-Anmerkung des Herausgebers (Heft 1), prosa IV. : Ankündigung des Verlags der Bremer presse (1922), prosa IV. : Neue deutsche Beiträge-Anmerkung des Herausgebers (1923) u. Anmerkung des Herausgebers (zu Heft 4) (1924) prosa IV.
 - W. Benjamin : Briefe 1. 2., Frankfurt a. M. 1966
 - H. v. Hofmannsthal, F. Ch. Rang : Briefwechsel 1905-1924, Die Neue Rundschau 70 (1959)
 - ベンヤミン : ゲーテの親和力 晶文社
 - 同 : 書簡 I, II 晶文社
 - W. Benjamin : The Origin of German Tragic Drama, London 1977
2. その他の参考文献
 - W. Fuld : Walter Benjamin, München, Wien 1979
 - W. Volke : Hugo von Hofmannsthal, Hamburg 1967
 - B. Witte : Der Intellektuelle als kritiker stuttgart 1976
 - 野村 修 : ベンヤミンの生涯 平凡社
 - グンドルフ (小口優訳) : 晩年のゲーテ 未来社
 - Th. W. Adorno : prismen (Stw 2)
 - Th. W. Adorno : Über Walter Benjamin (Bs 260)
 - G. Scholem : Walter Benjamin, Frankfurt a. M. 1975

付記 ベンヤミンを著作、手紙のうち翻訳があるものについては、これを使用しました。記して謝意を表します。